

15. ^{131}I -DMO による膵機能検査の試み

○駕海 良彦 森田 一徳
 鴨井 逸馬 仲山 親
 古賀 一誠 松浦 啓一
 (九大・放)
 小嶋 正治 山口 忠敏
 市来 憲一 曾根 久雄
 前田 稔
 (薬:放射)

1973年, 野田らは膵外分泌機能検査の一つとして膵 DMO 排泄試験を提唱した.

今回, 演者の一人である小嶋は ^{131}I で標識した 5-iodomethyl-5-methyl-2, 4-oxazolidinedione (^{131}I -DMO) を合成したので, ^{131}I -DMO による膵機能検査の可能性について検討した.

ラットにおける ^{131}I -DMO の体内分布では, ^{131}I -DMO $10\mu\text{Ci}$ (1mCi/mg) 静注後, 血液, 脳, 甲状腺, 肺, 肝, 腎, 膵いずれも 60分より 120分ではば plateau に達している.

また正常成犬による ^{131}I -DMO の膵外排泄試験では, ^{131}I -DMO 静注 60分後に Secretin 4c.u./kg 静注すると, 膵液 ^{131}I -DMO/血液 ^{131}I -DMO は 25分より 30分で最高 (1.57) となる. さらに腹部シンチグラフィでは, 膵影はみられなかった.

今後, 実験膵炎について検討していきたいと思う.

16~18.

座長 木下博史
 (長崎大・放)

このセッションは, RI in vivo に関する3題である. 鹿児島大の中条らは, 抑制下副腎シンチグラフィについて, 従来デキサメサゾン抑制が注視されていたが, ACTH 抑制およびピンホールコリメーターによる詳細な副腎像の検討が有意義であった症例を報告した. 次に県立柳川病院の甲斐田らは, 腎機能を皮質と髄質とに分け, おおのを $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DMSA, $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DPTA で検査し, static

と dynamic Image で検討し, 臨床的に有用であると発表した. 最後の演題は, 心筋 imaging agent として一躍有名になった ^{201}Tl -chloride (以下 ^{201}Tl と略記) を県立柳川病院の矢野らは腫瘍シンチに適用したところ, 早期 (0.5~3 hr; 3 hr が最良) に優れた像を得た. 九州ガンセンターの前田は ^{201}Tl の特徴として, 比較的分化型の腫瘍によく取り込まれ, これに対し, ^{67}Ga -citrate は未分化のものに収積が見られるようだと述べた. 演題 8 でも発表されたが, ^{201}Tl は甲状腺には有用であるが, ある種の臓器 (心筋, 生殖腺等) との親和性があり, 現段階ではそれぞれの特徴を生かすように臨床応用を考慮すべきであると思われた.

16. Cushing 症候群の 1 症例

主として副腎シンチグラフィを中心として

○中条 政敬 伊東 隆碩
 篠原 慎治
 (鹿大・放)
 川畠 尚志 大井 好忠
 米沢 傑
 (同・泌)

Cushing 症候群は慢性的な cortisol 過剰分泌に起因する疾患で, 通常一連の特有な臨床症状を呈するのが, われわれは高血圧症を主訴とし, その他の臨床症状に乏しく, screening としての副腎シンチグラフィが診断の端緒となった 1 症例を経験したので, その臨床像および各種検査所見とともに, 主として外来時および ACTH 負荷時シンチグラム, 摘出右副腎腫瘍のシンチグラムを供覧し, これらのシンチグラムおよび病理所見との対比検討を行ない報告した. 本症例は尿中 17 OHCS, 17 KS は高値であったが, 血漿 cortisol が正常範囲にあり, 診断上問題となったが, ACTH 負荷時シンチグラフィで健側 (左) 副腎の明瞭な描出をみ, 腫瘍よりの cortisol の自律性過剰分泌による ACTH 分泌抑制を間接的に証明したわけで, 本症例におけるこの検査法の有用性を特に強調した. また摘出腫瘍は分化と未分化の癌からなり, ^{131}I -